

テーマ2・誰かのために、私ができること 「助けたい」と『逃げたい』』

青森県立青森西高等学校1年 千葉友愛

「こんにちは」そう声をかけてくれたのは、隣のベッドで横になつていたおばあちゃんだった。私は夏休みに膝の手術を受け、大部屋に移つたばかりだったとき、初めて患者さんと会話をした瞬間だった。隣のおばあちゃんはたくさんお話をしてくれた。私は話しかけてくれたのが嬉しくて、自然と笑顔になつた。会話の終わりに、おばあちゃんが零した言葉「私、夜痛みで唸つちやうけどうるさかつたら言ってね」私は、言葉の意味を深く理解できなかつた。でも、夜になつてやつとわかつた、おばあちゃんの言葉の意味を。

消灯時間をゆうに過ぎた頃、隣から呻き声が聞こえた。イヤホンをつけていても聞こえるほどの大きな呼吸だつた。「痛い」と混じる声、それがずっとだつた。ナースコールは押さず、ただひたすらに痛みに耐える夜だつた。聞いている私も思わず逃げるようになつて聞こえないフリをした。夜が明けるとおばあちゃんは必ず「昨日の夜はごめんね。うるさかつたでしょ」と言つ。私はどこまで自分のことは後回しなんだらうと、思わず眉間にしわが寄つた。「辛かつたらナースコールちゃんと押してね」私はそう声をかけた。代わりに押すべきと分かつていても、私が看護師さんを呼ぶのはお節介だと、その言葉が最善だつたと自分に言い聞かせつた。数日続いても、昼間も呻くようになつても、それでもナースコールは押さない。私はなんで、押さないんだろう、助けを呼ばないんだろうとずつと思つていた。おばあちゃんの唸り声を聞くたびに私は自分の無力さを知つた。カーテン越しで姿が見えないから、私が勝手に判断してナースコールを押してはいけないと思つた。でも本当は逃げる言い訳が欲しかつた。そんなとき私の隣にいたおばあちゃんは私の正面のベッドに移動してきた。顔が見える距離になつたことで、もう逃げられない

気がした。今も、おばあちゃんがいつもみたいに唸つてゐる。痛そう、ナースコール私が押すべき?でも看護師さんを呼んでほしくないかも、やめてつて言われたらどうしよう、ナースコールを押したらなんて伝えればいい、看護師さんから迷惑つて思われたら。頭の中はおばあちゃんのことを思つてゐるようずっと自分のことしか考えていなかつた。ここでもまだ逃げてゐる自分が嫌いだつた。

ふと思いついた、将来私は誰かを助けられる人になりたいこと。今日の前で苦しんでいる人を助けられずに、未来の誰かを救えるはずがない。「看護師さん呼ぶか?」私の声は微かに震えていた。おばあちゃんは目が合つと痛みに耐えながら必死に頷いた。私は平然を装いながら看護師さんに向かいのおばあちゃんが辛そうだと伝えた。その一言でも、ちゃんと助けになつた。痛みが落ち着いた頃おばあちゃんはナースコールが届かなかつたのだと私に話してくれた。動けないほどの痛みを耐えていたおばあちゃん。私は、彼女が助けを呼ばない理由を、自分に都合よく遠慮や我慢だと解釈していたのだ。それは逃げ続ける自分を正当化する自己中心的な解釈にすぎなかつた。

おばあちゃんのためにしたナースコールを押すという小さな行動が、私自身を変えた。誰かのために動くことは、大きさなことじゃなくて、ほんの少しの勇気から始まるのだと思う。嫌われる覚悟、自分の中に潜む臆病さや葛藤を乗り越え、自分にできることを信じて差し伸べることが、人を救うことにつながるのだと。誰かのために私ができること、自分は無力なんだと嘆いている暇があるなら、今自分にできることを探すことだと思う。まだまだ未熟で日々学びだらけの私はまた、己自身と闘う場面がきっとあるそんなときもちゃんと逃げず向き合いたい。そういう私の一步も、いつか未来の誰かを救い社会を変えるきっかけになると信じてゐる。